

あとがき

序章でもふれたように、筆者の教師としての生活は担任した生徒の自殺ではじまった。その後に経験した既遂・未遂のひとつひとつの事例が、今なお鮮明に脳裏に浮かぶ。あのときどうしてもう一步踏み込まなかったのか、また、あの指導ではたしてよかったのかと悔やまれることばかりである。筆者にとって、ささやかではあるが鎮魂の書としたいのである。

40年ほど前、筆者は職務として「精神健康指導の手びき 第一集 自殺問題を中心として」(愛知県教育委員会, 1974)を編んだ。B5判, 63頁の渺たる小冊子であるが、この種の手びきの嚆矢となった。その中で述べた主旨は今も変わらない。

月日はながれて「子どもの自殺予防」(平成21年, A4判, 55頁)および「緊急対応の手引き」(平成22年, A4判, 12頁)が文部科学省から発刊された。大判の色あざやかな冊子である。これを手にしたとき、今昔の感に堪えなかった。このふたつの冊子は最近の自殺研究の成果をもり込み、予防の基礎・基本を簡潔にまとめたものである。ことに指導の際の心得についての記述は平明で、間然とするとところはない。また第34回日本自殺予防学会総会、プログラム抄録集(2010, 大妻女子大学)をみると、自殺予防活動の広がり、深まりがあきらかで、学会発足の昔を思い出すと、時の流れを思い知らされる。

そこに本書である。屋上屋を架すとの誇りはまぬがれないが、それでもなにかひとつ、つけ加えたい思いがある。子どもの自殺という難題に対応するためには、まずは指導の基本原則を示すことが大切だ。しかし、新しい事例に直面するたびに、それらがあえなく覆ることをしばしば体験した。あえて個々の事例の経過をたどることに心したのは、これがあつ

てのことである。子どもの自殺は大人の自殺同様、きわめて多様であつてひとつのマニュアルで間にあうものではない。事例を通じて臨機の対応ができるよう感覚を鍛えあげるほかはない。子どもの自殺の全貌はまだ解明されていないのである。

本書で十分ふれなかった問題に「死の教育」「自死遺族対応」「喪のしごと (grief work)」がある。また、学校における自殺予防教育については阪中順子 (小・中学校), 菊池まり (高等学校), 新井肇 (大学) らの注目すべき実践があり, また野々山尚志 (中学校) の報告があり, 大学生の自殺については, 大学保健センター, 日本学生相談学会が長く関心を寄せ, 報告に「学生相談研究」がある。大学生の自殺については, 中・高校時代の資料を欠くことはできないことはもちろんである。今後両者による共同の研究が望まれる (石井完一郎『青年の生と死の間』弘文堂, 1976)。職務上, 自殺に接することのある看護師のかかわり方については田中美恵子編『自殺の看護』(すびか書房, 2010) がでた。この中に, 看護の立場から, 子どもの自殺が取りあげられている。

筆者は, 自殺は心理のほか歴史や文化の文脈からもとらえるべきものであると主張してきた。Ⅶ, Ⅷ, Ⅸ章やコラムはその一端である。

ここに集められたものは単行本や雑誌・紀要等に発表したものだが, とくに今日的問題や文化的背景については新たに稿を起こした。小著をまとめるにあたっては, 同僚・先輩・研究者各位の助言や指導を得た。心よりお礼を申し上げる。なお, 編集については前著同様, ほんの森出版の小林敏史氏に格別お世話になった。

限りなく重いこの課題について, 力が及ばなかったことを深く感じつつ筆を擱く。

2012年8月

長岡 利貞